

ペスタロッチ・フレーベル・ハウスの教育実践と母性

—— 家庭・地域社会の教育力再生の視点から ——

橋川 喜美代

(キーワード：ペスタロッチ・フレーベル・ハウス，母性，H・プライマン＝シュラーダー)

はじめに

中央教育審議会答申「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について」(2005年1月28日)では、幼稚園等施設が「これまでの役割に加え、家庭や地域社会における教育力を補完する役割(「失われた育ちの機会」を補完する役割)、家庭や地域社会が、自らその教育力を再生、向上していく取組を支援する役割(「幼児教育の牽引力」としての家庭や地域社会を支援する役割)を担う」ことを強く求めている¹⁾。これを受け、文部科学省は翌2006年10月、「幼児教育振興アクションプログラム」をまとめ、目指すべき7つの施策の1つとして、幼稚園等施設が家庭や地域社会の教育力の再生・向上を図る必要性を掲げている²⁾。

このように幼稚園等施設が少子化、核家族化、都市化等、急激な社会変化によって引き起こされた子どもの育ちを巡る環境問題を解決する手段と目され、家庭や地域社会の教育力再生の役割を期待されるのはわが国の幼稚園教育史上初めてのことでないだろうか。これに対し、諸外国、とりわけ生誕地ドイツよりも幼稚園が発展したと言われるアメリカでは、1870年代から、都市のスラム街に流入する移民や貧民の子どもを墮落と犯罪から切り離す解毒剤として幼稚園は期待され、大学教育を受けた女性たちがその期待と葛藤から選んだセツルメントや各地に設置された幼稚園協会によって発展の道が切り開かれていく³⁾。

この牽引役を果たしたのが1893年、シカゴで開催された世界コロンブス博覧会(以下、シカゴ博と略す)において展示・紹介されたベルリンのペスタロッチ・フレーベル・ハウス(Pestalozzi-Fröbel Haus)である。シカゴ博においてペスタロッチ・フレーベル・ハウス展示の監督に当たっていたシェペル(Schepel-Hammink, A.)は、貧児の救済を目指すアメリカ人幼稚園教師たちに強い影響を及ぼし、シカゴ幼稚園協会(Chicago Kindergarten Institute)の結成を実現させた。シカゴ幼稚園協会は1894年、フレーベルのカイルハウ教育舎を模し、学生宿舎ゲルトルート・ハウス(Gertrude House)を開設。ゲルトルート・ハウスでは、他者と共感し学び合う共同生活を通して、愛と奉仕に裏打ちされた母性的かつ創造性豊かな幼稚園教師の育成が模索され始める⁴⁾。

ところで、ペスタロッチ・フレーベル・ハウスは1880年、全米教育雑誌(American Journal of Education)を通し、初めてアメリカに紹介された⁵⁾。ピーボディ(Peabody, E.)は、それがマーレンホルツ＝ビューロー夫人(Marenholtz-Bülow, B.M.)とペスタロッチ・フレーベル・ハウスの指導者、ヘンリエッテ・プライマン＝シュラーダー(Schrader-Breymann, H.)との思想的対立を検証するために現地に送った幼稚園教師による結果報告であったことを明らかにしている⁶⁾。この記事は1881年、バーナード(Barnard, H.)が編集した『フレーベルの幼稚園に関する論文集：各国における児童文化の原理と方法に関する提案を含めて』に再度掲載され、そこには1880年10月15日付けのシュラーダーの手紙が添えられていた⁷⁾。

ペスタロッチ・フレーベル・ハウスは、ドイツではマーレンホルツ＝ビューロー夫人、アメリカではブロー(Blow, S.)らオーソドックスなフレーベル主義者たちの抵抗に合って、発展の道を塞がれていた。ホール(Hall, G.S.)は1900年、『フォーラム』(Forum)誌においてその様子を次のように克明に語っている⁸⁾。

「今日、ベルリン郊外に新築された壮大なペスタロッチ・フレーベル・ハウスほど優れた幼稚園の設備を整えた施設はおそらく世界に類を見ない。そこには広い運動場、個人用花壇、魚のいる池、鳥たちが棲む野生の木々、料理学校用に十分整えられた建物などが備わっている。海外で研究している幼稚園教師たちにとって、そこは全く最良の場所である。私はそこで昨年の夏、滅多に味わえない喜びを感じ、啓発を受けながら学んだ。しかし私たちは、フレーベルの名前の上にペスタロッチの名前がついているという理由から、このペスタロッチ・フレーベル・ハウスに近づかぬよう効果的な警告を受けているので、私はそこでわずかに1人のアメリカ人女性を見たにすぎなかった—ドイツのもっと設備の劣っている幼稚園には、多くのアメリカ人がいたというのに—。このペ

スタロッチ・フレーベル・ハウスでは、恩物と作業の使用は最小限にされ、もっと適切なものに徐々に取り替えられている。教員養成のための課程には、育児や料理、また教育一般の歴史なども含まれていた。正午には、年少児たちが体育館の床にマットレスを敷いて昼寝をしていた他、多くの賞賛すべき新たな工夫—最も必要なのだが、その大部分はアメリカの幼稚園のオーソドックスなフレーベル主義者には許されていない—が為されていた。』

1889年、ジェーン・アダムズ (Addams, J.) がシカゴに設立したハル・ハウスを代表とするセツルメント事業は、自堕落な習慣や悪徳に陥っている移民と生活を共にし、移民の生活改善と教育を図る実践活動であり、幼稚園を唱導するものではなかったが、幼稚園を社会の隅々にまで浸透させた。セツルメントや幼稚園協会の設立が、オーソドックスなフレーベル主義者による保育を変革する力となる中、ペスタロッチ・フレーベル・ハウスは、社会改良を目指すセツルメントや幼稚園の目指すべき指針として受容されたのである。

本研究は、シュラーダーによるペスタロッチ・フレーベル・ハウスの教育構想ならびに保育・教育実践を明らかにしながら、家庭・地域社会の教育力再生の手がかりを探ることを目的とする。

I. ドイツの母性主義フェミニズムと幼稚園教員の養成

ドイツでは1870年から1910年にかけて、急激な工業化が進み、それに伴う問題が出現し始めた。農林水産業従事者と鉱工業部門の従事者の数は1895年にほぼ同数となり、以来逆転傾向を辿ると共に、工業化は1871年にはわずか8つにすぎなかった10万都市を、1910年には32へと急増させた。農村からの移住者が相次ぎ、1850年には42万に満たなかったベルリンの人口は、1880年には112万2000人、1910年には207万1000人へと膨れあがった。工業化に伴う無計画な都市化は、劣悪な住居環境を生み出し、婚姻外出生率の上昇や性モラルの低下、疾病の温床といった社会問題を引き起こし始めたのである⁹⁾。

まず、シュラーダーの生涯を眺望しながら、フレーベルが彼女の女性観に及ぼした影響と教員養成に込めた彼女の思いを明らかにしておこう。

1. シュラーダーの女性観：その変遷と確立

ヘンリエッテ・ブライマンは、1827年9月14日、ガンダースハイム教区マーレムの牧師家庭に生まれた。母方の祖父は、フレーベルの母の兄にあたる家系で、10人きょうだいの長娘であった。ヘンリエッテは、ボルフェンブッテル女学校を修了し、父から堅信礼を受けたが、厳格な牧師家庭に馴染めず、職業猶予期間の長い当時の“女子”教育から解放されることを待ち望んでいた。幼い時から弟妹の世話に時間を捧げてきた彼女にとって、それは自らの存在を脅かす長さであり、我慢できないものであった。しかも、唯一与えられていた家事労働も退屈なだけで、空しい表面的な社交活動に至っては時間の浪費と感じていた。19世紀の市民女性に強いられる怠惰さに押しつぶされそうなヘンリエッテは、退屈で無味乾燥な生活から救い出してくれる白馬に乗った素敵男性を夢見るようになっていた。1848年夏、こうした様子を見かねた両親は、彼女を幼い妹が通っていた大伯父フレーベルのカイルハウ学校に送った。彼女を精神的危機から救い出し、新しい生活を踏み出す力を与えたのは、教育的家庭が本来備えている教育的雰囲気であった。ヘンリエッテはここに、男女両性から構成される情愛的かつ支援的な共同体の存在を見出した¹⁰⁾。

そして、ルードルシュタットの教育家集会に参加したヘンリエッテは、明確に職業意識に目覚めた。この時まで、政治に全く興味が無かったにもかかわらず、彼女は保守的な教師たちが幼稚園の女性教師や管理者雇用に反対することに憤慨し、教職こそ自ら考え、心を発達させられる職業であることを明確に認識した。しかも、フレーベルが期待しているのは、幼稚園が女性たちによって運営されることであり、彼の哲学的な思想は女性たちによってのみ実現されなければならない。とはいえ、女性たちが哲学を振りかざすことは慎むべきで、女性の役割は男性たちが創造した哲学的な考えを適用し、それを実現させることにある。彼女は、フレーベルやミッテンドルフが女性を全く違った風に見、女性たちの価値を信じていることが心底嬉しかった¹¹⁾。こう思うようになった彼女は1848年の冬、ドレスデンで開催されていた幼稚園女性教師のための短期養成コースに参加した。

1851年、彼女はシュヴァインフルトに設立された自由教区の幼稚園と学校の指導を引き受けたり、52年にはバーデン-バーデンで幼稚園教師として働くようになる。しかし、そうした施設もプロイセンの幼稚園禁止令の影響を受けて閉鎖。個人教師などをして働いた後、54年に故郷ヴァッツムに女子教育舎を開設した。この教育施設の目的は、市民層の女子を対象に、科学教育、音楽教育、言語科目など一般的教養に加え、乳幼児教育および料理

や、庭仕事などの家事労働に関する知識を実践的に教えることにあった¹²⁾。

ベルギーやスイスに招聘され、フレーベル理論の講座を受け持つようになった彼女は、やがて有名になり、ヨーロッパ諸国の女生徒たちがヴァッツムの教育施設に送られてきた。1864年、手狭になった施設はノイ・ヴァッツムに移転。施設は①12～14歳を対象とした女子教育、②14～17歳を対象とした女子教育、③成人女性の研修の3部門から構成された。③は女性教員あるいは、幼稚園女性教員を養成する部門で、実習のために、幼稚園と基礎クラスが付設されていた¹³⁾。

1872年、彼女はアンハルト鉄道管理局長のカール・シュラーダーと結婚。45歳であった。この感情面でも、知性面でも相性の合った結婚は、彼女の女性観に対する信念を強めた。それは両性が価値ある役割を果たすことによって同等に補完し合うという理想の平等観である。彼女は、両性にとって適切な職業的役割の相違、つまり役割分業を決定する要因を能力差ではなく、倫理的志向に求める。公的分野で活躍する男性は自らのために、思想体系、科学、芸術に関する知識や技能に憧れる。しかし、私的かつ家庭的な領域で活躍する女性は、人とのかわり、つまり子どもに真実・美・善といった倫理を育むために、思想体系や科学、芸術に関わる知識や技能を適用する必要がある。したがって、女性が女性らしいかそうでないかは、知っているか知らないか、できるかできないかによってではなく、知識や技能を利用する方法が倫理的かつ理性的かどうかによって決まるのである。生活科学にかかわる知識や技能の研究ならびに学習によって真に教育された女性のみが、心地よい雰囲気の中で幼い子どもの世話や教育を全うし得る。女性がこの倫理的自立を確保するためには、男性の統制から解放されるべきだと主張した¹⁴⁾。

2. 幼稚園設立の主旨と母性の延長・拡大

ドイツにおいて、体系的な教員養成の兆しが見え始めるのは、1830年代のことである。幾つかの女学校が教員養成クラスを併設したり、国家も女性教員養成所やその予備校を設立して、女性が教職に付けるよう準備し始めた。しかし、国民学校や女学校の低学年しか教えることが許されず、女学校教員の圧倒的多数は男性であった。1833年のプロイセンの女学校の教員団における女性の割合は35%で、世紀転換期になって57%に達し、女性教員の全体数はこの間に20倍に膨れあがった¹⁵⁾。

40年代以降に始まる初期女性運動は、こうした女子教育制度の改善と拡大を訴え、市民女性に自立できる機会を高めると同時に、社会扶助、貧困家族への援助に乗りだし、貧困の悪循環を打ち切り、労働者の道徳的、経済的、文化的生活を改善し、国家の統合を目指し始める。フレーベルの幼稚園運動は、女性が主婦・妻・母といった「女性の使命」の枠を家庭から社会へとわずかに延長・拡大し、男性の職業領域・公的領域に一步踏み込むための理論的根拠を与えることになった。

1840年5月1日の幼稚園設立の書、つまり「幼稚園の設立および実施のための計画案」の冒頭において、フレーベルは次のように述べている¹⁶⁾。

「女性たちの生活と子どもたちへの愛、子どもたちの生活と女性たちの心、一般に幼児保育と女性の心情を分離するのは、ただ悟性だけである。これらはその本質上、一つのものである。というのは、幼児期を通じての人類の肉体的ならびに精神的存続を、神が女性たちの心 (Herz) と心情に、すなわち真の女性の靈感 (Sinn) に委ねたからである。…しかしながら、生活は、その多様な発展において、またその多様な形成において、しばしば、母親の感情に逆らって、一般に女性の心情と子どもの欲求に逆らって、外的諸関係の巨大な暴力によって、幼児と女性たちの生活、女性らしさと子どもたちの生活を不自然に分離してきた。(中略) この合一を再び獲得することが、真の人間の友および子どもの友の最大の関心でなければならないし、また女性の心情の尊重を承認する人びとの最大の関心でなければならない。」

フレーベルはこの書において、幼児保育と女性の使命との関連性を明らかにしながら、外的暴力によって引き裂かれた女性と子どもの生活を再び合一することの必要性を訴えた。本来、神は女性の心と心情、その霊に幼児の教育を委ねられた。にもかかわらず、労働者家族では「なんとか暮らしていく」のがやつのことで、母親はそのための内職に自分をすり減らして働いた。料理や掃除、洗濯にかかる時間は最小限で、子どものことに構っている暇などなかった。したがって、路上に放置されて昼間を過ごす幼児も少なくなかったのである。

こうした家庭に、女性と子どもの根源的合一を復活させるには、「幼児期の女性保育者、すなわち保母、子守、女性の児童指導者が養成され、また若干年齢の進んだ子どもたちのためには、男性の保育者、児童指導者及び教育者が養成される」必要がある。というのも、フレーベルは彼らが「母親の心の要求、彼女の希望・心配および努力と幼児期の子どもの必要との真中に入って、母親がたとえ最善の意志をもったにしても子どもに対してなり

得ないものになったり、母親が手渡したりあたえたりし得ないものを、子どもたちに手渡したりあたえたり」できる媒介者となりうると考えるからである。そして、幼稚園には「養成施設の生徒たちのための実習施設であると同時に、同じ精神で実施される類似の施設のための模範施設となる」課題が付与された¹⁷⁾。

1840年6月28日、フレーベルはゲーデンベルク祭において、「一般幼稚園」のために財団を設立した。この財団設立の時期を境にして、フレーベルは養成の対象を男性の児童指導員から女性保育者へと転換していく¹⁸⁾。

Ⅱ. ペスタロッチ・フレーベル・ハウスの教育構想

結婚を契機にベルリンに転居したシュラーダーは、マーレンホルツ＝ビューロー夫人と共に、貧民や労働者の子女を救済し、貧困化を予防する手段として民衆幼稚園の拡大を進めた。1873年の民衆幼稚園を皮切りに、労作学校、初等クラス、料理・家政学校、幼稚園など各種教員養成課程、共働き家庭の子どものための昼食施設、女生徒のための寄宿舎（ビクトリア少女ホーム）、子ども用浴室などを付設し、「ペスタロッチ・フレーベル・ハウス」と総称する一大施設にまで発展させた。

1. ペスタロッチ・フレーベル・ハウスの教育理念と「精神的母性」

シュラーダーはフレーベルの幼児教育論を次のように捉える。フレーベルは、幼児期には不釣り合いな知的発達を強いる早期教育を払拭するために、自らの教育理論を構築した。彼が幼児期の教育に求めたのは、①子どもにとって合自然で、健全な道徳的性向を与え、②知的文化や発達と和合した情緒面の発達機会を供給すること、の2点である。知的発達が早期教育の出発点にならないように留意を促すとともに、フレーベルは母親の毎日の養育や仕事、子ども自身の生活の中に教育の最も優れた題材を求め、その題材によって子どもが周囲と関わる活動を組織し、その原理を学び取らせ、後の思考発達の基礎とも言うべき直観と経験の宝庫を子どもに得させようとした。他人を愛する機会を与えることが、子どもの内に愛情を育む唯一の方法だと捉えるフレーベルは、恩物作業によって、母親が家庭において実施している仕事そのものに潜んだ教育的価値を明らかにしようとした。のみならず、幼稚園を通して公教育に家庭的雰囲気を導入しようとしたのだと説明している¹⁹⁾。

こうした点から、彼女が強調するフレーベル幼稚園の真なる価値は、①公教育への家庭的雰囲気の転移、②自分の利益のみならず、他人の利益のために製作能力を発揮させる材料や機会の保障、③感情と性向の発達、にある²⁰⁾。とりわけ、③は学校が思考の発達を目指すのとは対照的であり、これがフレーベル幼稚園を早期教育の出発点と見誤らせないためにも強調しておく必要があると言う。

シュラーダーはマーレンホルツ＝ビューロー夫人のやり方との違いを浮き彫りにしながら、自らの幼稚園と教員養成の有り様を次のように述べている。「まったく、彼女の幼稚園は学校のようなところではフレーベル主義の作業が学校のようなやり方で行われ、しかも学校で活動できるよう養成された幼稚園女性教員によって教えられている。この女性教員たちは、子どもたちに体系性を強調している。というのも、彼らが家庭でそれを身につけていないからである。しかし、私が求めるのは、家庭と幼稚園をできる限り似通ったものにするにある。そうすれば、子どもたちが作業を通してこれまで以上に家庭に体系を導き入れ、幼稚園も型にはまったものから解放される。…（略）…マーレンホルツ＝ビューロー夫人は3流ないし4流の女性教員（Lehreinne）を養成している。それに対し、私が養成しようとしているのは、母性的教育者（Erzieherinnenn）である。個々の課業を教えることが目的ではなく、子どもたちと一緒に生活教材を開発するために、…（略）…居間の教育力を生み出す」必要があるからである²¹⁾。

マーレンホルツ＝ビューロー夫人の幼稚園のように、学校化させないために、シュラーダーが母性的教育者の資質として求めたのが、「母性」（Mutterlichkeit：母のような優しさ）である。彼女はこの「母性」を出産や育児という「身体的母性」と区別して「精神的母性」と呼び、後者をフレーベルが備えていた「子どもの本性や願望、必然性への深い洞察の産物²²⁾」と規定し、マーレンホルツ＝ビューロー夫人との違いを生み出す鍵概念と捉えていた。「理性的母性」は抽象的理論によって身につけられるものではなく、これが外見では母親の毎日の仕事と変わらないように見える活動に一筋の道理の糸を結ばせ、発達を目指す保育の流れを確立する。シュラーダーは、幼稚園教師が母親と子どもの本源の合一を媒介するために、主婦・妻・母としての女性固有の素質を「子どもの本性や願望、必然性への深い洞察」を伴った「精神的母性」にまで教育して高める必要性を求めたのである。

ちなみに、姫岡の説明によれば、シュラーダーは「温かい愛情でわが子を包んで保護するという資質は家庭内だけではなく、社会でも必要とされており、したがって母親が家庭内で果たしている役割をそのまま社会にもち

こんで多数の子どもたちの教育に役立てることもできるし、自分の子どもを産んでいない女性も母性的資質を社会のなかで発揮することは可能だと考えた。彼女はこのような試みを、わが子の出産と育児という『身体的母性』と区別して『精神的母性』と表現し、母性的資質の発揮という課題は男性には代替不可能なものであり、女性特有の活動分野が社会のなかに存在すると主張した。彼女は、女性を家庭内に封じ込める役割を果たした母性を逆に社会進出の足掛かりとしてとらえ、これによって女性に職業への道を開くとともに、保母や幼稚園の教師など社会教育的な分野で女性の職業を作り出した」点で、ドイツのフェミニズム運動に大きな影響を及ぼした²³⁾。

シュラーダーは養成校の目的が主婦として、母親としての将来の仕事に向けて若い少女たちを準備させることにあると言う。つまり将来、彼女たちが主婦としての義務と子どもの教育者としての責任を果たす方法をより明確に認識し、実践可能とすることに養成校の目的があった。したがって、主婦としての家事労働を追求するための料理学校と、子どもの教育に関わる幼児教育の実践と理論の両方が重視され、その結合が目指された。

彼女が準備した幼稚園教員の養成カリキュラムは次のような科目で構成されていた²⁴⁾。①衛生学を含んだ教育理論、②教育及び宗教史、③幼稚園教育法の理論と実践、④教授法、⑤幾何学、⑥歌、⑦描画と彩色、⑧体操、⑨自然史、⑩政治経済の要素と慈善施設への訪問、⑪フレーベルの恩物、⑫幼稚園教育と学校教育の実践に対する特別な準備、⑬針仕事、⑭手工（フレーベルの作業の適用、マット編み、籠作り等）、⑮家事労働。

シュラーダーが家事労働を重視するのは、人間に自然、商業、あらゆる市民生活の多くの部分と一貫した関わりを持たせる点にある。賢い母親が子どもの非常に幼い段階から、家事と関わる多くの機会を与え、子どもを人間、神、自然との愛すべき関係に置くように、家事労働の重要性を幼稚園教師に認識させ、フレーベルが書いた『母の歌と愛撫の歌』の目的を実現させようとした。そのために、シュラーダーはペスタロッチ・フレーベル・ハウスに台所、浴室、中庭、砂場・小石・松傘・苔・貝殻・藁などの自然素材を整備した遊び場と秩序に従った庭仕事用の庭、ゲーム、作業、手工を行う部屋とホールを完備した²⁵⁾。

2. 月主題の構想と実践

シュラーダーの教育思想と実践は、貧民の保護と教育、「居間の力」の重視、労働の教育的意義に対するペスタロッチの考えを高く評価し、「ペスタロッチとフレーベルの融合」を図った点に特徴がある。彼女は、家庭的温かさと子どもたちの多面的な発達を促す飼育、手工、料理、掃除、フレーベル的作業など、さまざまな創造的遊びや仕事を幼稚園に導入した²⁶⁾。そして、子どもたちを15~20人程度の小グループに分け、男女を問わず、掃除や洗濯、料理や配膳や後片づけといった家事労働に取り組みせ、幼い頃から全体の一員としての自分を自覚し相互援助の精神で働くことを求めた。また、毎月1つの主題（「月主題」）を設け、それを中核にして一定期間展開される活動は、幼稚園と初等学級（幼小）を繋ぐ教育的作業であった。しかも、その教育的作業が単なる機械的な詰め込みにならないために、シュラーダーは母性的教育者に植物や動物の科学的かつ実際の教材研究を課した。

以下、一年間の月主題の内、9月の小麦の栽培収穫と1月のいえすずめの実践を示しながら、シュラーダーの保育・教育の特徴を分析しておこう。

一年間の月主題²⁷⁾

10月	初火、又は猫とネズミ	4月	雌鳥、又はすみれ
11月	リング、又は大工	5月	蜂、又はこふきこがね
12月	もみの木、通常のツタ、ときわ木	6月	毛虫と蝶、又は鳩の家
1月	いえすずめ、野うさぎとうさぎ	7月	(休暇)
2月	氷、雪、水。洗濯	8月	蛙と蠅、又は牛
3月	魚	9月	小麦、又はジャガイモ

(1) 小麦の栽培収穫

4歳から6歳の子どもたちは週1、2回自分たちの菜園作りを実施する。春に蒔いた小麦の種は観察とともに、収穫の喜びを子どもたちに与えてくれる²⁸⁾。豊かな実をつけた小麦の茎が部屋に運ばれ、それぞれ1、2本ずつ受け取る。子どもたちはそれによって、さまざまな茎の特徴を学んでいく。茎の高さ、茎の中の空洞、節の

ある茎、実の重みに頭を垂れている茎の様子など。注意すべき点はこうした学習が教師の言葉によって詰め込まれるのではないということである。子どもたちは麦藁を使ってシャボン玉吹きを楽しむ。その過程で、麦藁の中は空洞であること、しかし節があるとシャボン玉が吹けないことに気づく。

2日目、小麦が庭で脱穀される。子どもたちは順に小さな竿を利用する。穀粒が集められ、籾殻が外される。穀粒の一部を種に播くために残し、後は石を使って粉にする。さらに3日目、小麦粉にされ、パンケーキが焼かれる。大人の指示に従い、その過程での役割が各自に言いつけられる。年長の子どもは年少が僅かな用足しに走り回っている間、卵をかき混ぜ、粉を振るいながら混ぜていく。焼き上がるまでの時間、今までの活動がさまざまな作業によって表現される。年長の子どもたちは小麦の実や脱穀用の挽き臼を刺し絵にする。一方、年少の子どもは挽き臼をかたどっている。その日の中心作業であった棒並べと環並べでは、小麦粉の袋を運んだ手押し車がデザインされる。

4日目、教師はこの活動を要約するような物語や詩を子どもたちに聞かせ、一、二週間に及んだ活動経験の総まとめを行う。ここで読まれる物語や詩はおそらくフレーベルの『母の歌と愛撫の歌』の「お菓子づくり」だと思われる。母親が「人類の連続的発達を目指し、内面に生きた結合の中で、これを行う²⁹⁾」には洞察と認識を持って、意識的に成長しつつある子どもを導く必要があると考えるフレーベルは、「内的に生きた関係」を「お菓子づくり」に表現している。母親が与える子どもの大好物パンは子どもが母親の手から受け取るまでに焼かれなければならない。パン屋は母親の愛と子どもの望みを媒介する生活の内的関係の大きな鎖の一つである。しかし、それは決して一つだけの鎖でもなければ、最後のものでもない。遊戯の間に母親が機会を捉えてこの内的関係を明らかに知覚するように導くなら、全ての鎖の輪は認識させることが出来る。具体的に言うなら、粉屋が粉を挽かなければパン屋はパンが焼けない。農夫が穀物を持ってこなければ、粉屋は粉が挽けない。さらに田畑が穀物を実らせないなら、農夫は穀物を実らせることは出来ない。自然が調和的にその力を及ぼさないなら、田畑は穀物を実らせない。もし神がその力と材料を自然の中に配り、神の愛ですべてのものを目標に向かって導かないなら、自然は調和的にその力を及ぼすことは出来ない。こうした自然界の輪を知覚認識させ、神への愛に到達させることが母親に期待されていた³⁰⁾。こうした目的が単なるごっこ遊びを通してではなく、子どもが実際に農夫・粉屋・パン屋の担うことを通して、直接的に認識させることにシュラーダーの実践の特徴がある。

(2) すずめ

すずめは人間にとって忠実な仲間ではあるが、凶々しく、招かれざる客ともなる³¹⁾。そこで、“宿なし子（浮浪児）”などと揶揄されたりする。幼稚園では焼き鳥にされたり、その滑稽な振る舞いを見て笑われるすずめたちに昼の残り物を与え、観察の対象にする。

1) 4歳児の指導計画³²⁾

- ①すずめは何を食べるのか：嘴を使って餌をついばむ様子や羽根、足、尾の動きについて観察する。満足している時と怒っている時の泣き声や尾の動きに注目し、すずめが飛び去るのを見届ける。身体表現でその動きを模倣する。
- ②すずめはどこまで飛び去ったのか：すずめの住み家はどこにあるのか。卵が産み付けられる巣の近くに、ウールの端切れ、麻糸、わらを置いておき、すずめが運び去るのを観察する。
- ③子どもたちが巣を観察できるよう、雛の世話をする期間、飼育箱を作る。
- ④今までに観察したすずめの特徴を要約して話にする。
- ⑤フレーベルの『母の歌と愛撫の歌』から、挿し絵を選び、「すずめよりもおとなしく、控えめな鳥たちがいます。庭や地上近くに巣を作り、生け垣や木で甘い歌を聞かせます。こうした鳥の一種がいわひばりです。ここに小鳥の絵があります。」と説明しながら、挿し絵に添えられた詩を読み聞かせる。

2) 移行クラス（5歳児）の指導計画³³⁾

5歳児の場合、上記に記した4歳児の内容に加え、主題にかかわる問いに直接答える学習スタイルに慣らすように計画が立案される。

1日目：子どもたちは餌づけしているすずめの話をもう少し広げるよう教師に励まされる。数分後、教師は以下のような問いを投げかける。

教師：「私たちがしているように、すずめも雑談するのかしら？」「アニタ、あなたはどう思う？」

「すずめたちが静かに話している時、私たちはその音を何と呼んでいるのかしら？」

「すずめがケンカしている時、どんな音をたてているの？」
「私たちが撒いたパン屑を取ろうと、すずめはどんな風に動くのかしら？」
「すずめは地上から屋根の上へとどんな風に動いているの？」
「すずめは何を使ってちよいと飛ぶのかしら？」
「すずめは何を使って飛び上がるのかしら？」
「羽根はすずめのどの部分についているの？（その部分は胴と呼ばれている）」
「暗くなり、眠くなったら、すずめはどこへ行くのか知ってる？」
「私たちのすずめは時々、通り、やお屋、庭、木、野原へと飛んで行くのは何故かしら？」
「すずめは何を食べるのかしら？」

こうした問いの後、『馬とすずめ』の挿し絵が示され、クラス全員が挿し絵に添えられた詩を暗記する。最後に鳥の歌を歌う。

2日目：上記の問いの中で、正解がすぐに出なかったものに集中して問いがなされる；観察して答えが見つかるように、問いに印を付ける。教師は前の時間に、すずめが餌を食べていた時の話をした子どもに、話の内容を確認し、次のように問いを焦点化していく。

「すずめは何で餌をついばんでいたの？」「すずめには歯があるのかしら？」「嘴は体のどの部分についているの？」「嘴のことで、ほかに何か気づいたことはある。」「頭の上で、ほかに何か気づいたことはある。」「すずめは音が聞こえていると思う？ あなたがそう考える理由は？」「あなたが尾っぽを動かしているすずめを見たのは何時のことかしら？」「どうしてすずめは木の枝から落ちないのかしら？」
「すずめの足は何本？ 足には何か付いているのかしら？」

教師は子どもたちが観察できていない部分を確認し、問いの形に要点を絞り、次の時間までに答えが発見できるよう導いていく。午後の「刺し絵」の時間は、すずめがデザインの主題になる。

3日目：「すずめの目はからだのどの部分にありますか。」「嘴はからだのどの部分にありますか。」「鼻孔はからだのどの部分にありますか。」「耳はからだのどの部分にありますか。」「羽根、足、尾は体のどの部分についていますか。」

3) 初等クラス（6歳半）の指導計画³⁴⁾

このクラスでは、次の点に子どもの注意が向けられる。

①大きさ（死んだすずめの測定）、②雛の世話：雌と雄のすずめが果たす役割の違い、③嘴、羽根、かぎつめの形と部分、④毛並み：羽根、尾、胸、背骨の羽毛に見られる主な違い

主題「すずめ」は、子どもがすずめを観察できる場を作り出し、生活の中で感じる気づきをお話にして聞かせたり、『母の歌と愛撫の歌』を使って鳥に関する詩を読んで関心を深める。5歳児は小学校への移行期として、言葉でのやりとりができるように導かれていく。5歳児から付加される教師の問いは、子どもたちの目を体のつくりや特徴へと焦点化し、生態へと向ける。そして、そうしたやりとりの中で、観察力や洞察力を育み、食べ物を通して、鳥が周囲の環境とかわって生きていることに気付くよう陶冶されるのである。しかも、「刺し絵」を使った表現は子どもの観察力を発揮する場となる。こうした幼稚園教師と子どものやりとりは、子どもと子どもらしい性質に即した関わりであって、シュラーダーが忌み嫌った学校のように体系化された厳しい、命令的な悟性形式による調教ではない。さらに、6歳児はそれまでの経験を踏まえ、生態から成長にかかわる条件へと広がっていく。こうした科学的で実践的な実践は、当然のごとく幼稚園教師に、子ども理解と教材研究を課すことになった。

3. 真なる家庭生活と科学的で実際的な教材研究

ペスタロッチ・フレーベル・ハウスは幼稚園生活の原型を家庭生活に求めた。アメリカから派遣された幼稚園教師の目を奪ったのが、洗濯ごっこことアイロンかけである。男女問わず、すべての子どもが人形の服を小さな台の上に置いたタライで洗濯し、綺麗になったストッキング、ズボン下、スカート、衣服、エプロンなどを小さなピンで固定し、ロープに一行に干していく。洗濯物が乾くと、子どもたちはアイロンをかけ、綺麗に皺を伸ばし、ナイトガウンの人形に服を着せる。子どもたちが楽しんで展開する洗濯屋に、観察者は仕事の妙趣を味わったと言う³⁵⁾。

こうした家事労働の体験は、真なる家庭生活と結びつくことによって、道徳的・宗教的な感情に向けて魂を開

き、キリスト教的真理を受容し、人としての徳を高める。ペスタロッチ・フレーベル・ハウスの施設長、シェベルはペスタロッチ・フレーベル・ハウスが「目的としている観点は正しい教育によって人の徳を高めることにある。そのための手段は為すことによる個性の開発にある。為すことは常に人のニーズを満たす。私たちは為すことが他者の行為の単なる模倣とは考えていない。あらゆる行為は真なる動機と目的を持っている。それゆえ、私たちは十分な家庭環境を保障し、子どもに真に為すことによる発達への恵まれた機会を与えると共に、義務と責任を持った多くの家族員から成る家族を創造する。家庭は最も高次の活動領域である。活動は真なる生活と結びついた時にのみ、教育的な価値を持ち得る」と述べている³⁶⁾。

そのために、シュラーダーが幼稚園教員養成の出発点として重視したのが、子どもに慣れるということであった。子どもを知り理解するには、まず子どもと生活できる機会を多く与える必要がある。ペスタロッチ・フレーベル・ハウスには、幼稚園や初等クラス、労作学校に加え、幼稚園を卒園した子どもたちが招待され、水曜と土曜の午後定期的にやってくる。彼らが仕事場に入って、仕事をしたり、遊んだり、会合を開くのを助けるのが養成クラスに学んでいる女生徒たちである。彼女たちはこうした機会を用いてまず子どもに慣れる。

子どもに慣らすことと同時に、シュラーダーが重視したのは、モデルとすべき幼稚園教師の保育・教育を観察させることにあった。シュラーダーは従来養成校で行われているような体系的な方法ではなく、子どもの特性や願望、必然性を観察の中で洞察することによって、「幼稚園教師は家庭的義務と学識を教えられなければならない。彼女たちの心が、子どもたちの教育にとって最良の材料がその作業の中に見出せるという事実を認識させることである。彼女らの中に、ドイツ語で『母性』と表現されるような、真に母親らしいやり方を発達させることが重要である」と捉えていた³⁷⁾。女生徒たちは、幼稚園教師の実践を通して、子どもの道徳的・宗教的な感情がキリスト教的真理へと向かう姿を認識できなければならない。そのためには、理想のモデルとなるべき幼稚園教師が幼稚園には不可欠であった。

シュラーダーは幼稚園教師を精選し、幼稚園に家庭生活と教育的雰囲気が保たれるよう細心の注意を払っている³⁸⁾。彼女の求める資質を持った教員の育成が図れるまで園児数を増やさないこと、幼稚園の材料を限定しないことに努めた。彼女は、フレーベルの精神は恩物作業によって保持されるのではなく、その代用物は見出せると判断する。子どもがどうしても箱が必要ななら、自分でそれを作り出せばいい。折紙、切り紙、糊づけ、そのカバーの装飾まで、子ども自身で考え工夫しながら作る。こうした心を育てるのが本当の教育だとシュラーダーは考えていた³⁹⁾。

こうした養成段階を踏まえた幼稚園教師や助手に課せられるのが、一年間の各主題にかかわる教材研究である。週一回各主題に関する研究会合が開かれる。植物の例を挙げておこう⁴⁰⁾。

- ①外的構造：大きさ、外皮、主な部分、部分の下位区分とその位置関係
- ②内部構造と成長：種の構造、その成分、生息地、発芽期間、発芽過程（細胞、組織と内容；細胞組織；樹液の循環；根の呼吸；葉の機能；導管と分泌液）、発芽から完全な樹木になるまでの生長期間、繁殖、樹齢
- ③地理的分布
- ④歴史
- ⑤栽培：一般的問題、かかる病気
- ⑥家政学におけるその位置
- ⑦分類

主題に関する知識を完全にするために、各教師は共同の情報を交換した後も、情報収集に気を配る。教師の側の情報不足が機械的な教授法に陥り、子どもを調教する原因になるとシュラーダーは考えていた。情報収集は子どもの精神により具体的かつ鮮明に働きかけるための手段であり、それを怠ることは教師としての義務を放棄したことに他ならなかった。

貧児を対象とするシュラーダーの協会には、付設のバスルーム、医務室、収納部屋などが整備されていた⁴¹⁾。母親たちとの親密な交流を保つために、母親のニーズや不足に十分かつ慎重に対応することが求められたが、最も重要な供給物はミルクであった。貧しい家庭では赤ん坊にビールを与えることも平然と行われ、当然のこととして死亡率が高かったからである。バスルームには大小さまざまなバスタブが備えられ、母親が望めばいつでも貸し与えられた。また、幼稚園では肝油、ワイン、余分な肉が常時、必要な時に与えられるよう準備され、有能で、母親の様な寮母が昼も夜もその世話を当たっていた。さらにフランネルや亜麻布、あらゆる種類の古着が部屋に運ばれ、母親や年長の娘が修理したり、最高のものにリフォームするように指導された。これは非常に興味ある仕事の一部であった。というのも、子どもに限らず、大人たちでさえ、繕ったり、教わったものを作るより

も、自分たちが欲しい商品に仕上げることはより興味を感じるからである。

幼稚園でのこうした貧困家庭への経済的支援は単なる施しではない。貧困家庭の母親と将来母親となるべき少女たちの自立が求められ、衣食住に関する援助は肉体のみならず、道徳的に働き、貧困家庭の家族を変える契機ともなった。

おわりに

本研究は、家庭・地域社会の教育力再生の観点から、ペスタロッチ・フレーベル・ハウスの教育的構想ならびに保育・教育実践を論じてみた。ペスタロッチ・フレーベル・ハウスは、労働者階級の子どもたちと教員を目指す女生徒が生活を共にする家庭であり、母親的な愛情に包まれた子どもたちが自立した存在として歩き出す経験を積み重ねたり、女生徒たちが家庭の母親や教員へと準備される練習の場となっていた。ペスタロッチやフレーベルが唱道した女性の豊かな感情的倫理の中に、女性の文化の独自の価値を見出し、疎外された貧民の立場から社会を見る視点が構築されていたペスタロッチ・フレーベル・ハウスは、自活を目指す少女や母親たちが手に職をつけたり、さまざまなニーズを抱えた親たちが集う地域の一大教育・福祉センターであった。

ペスタロッチ・フレーベル・ハウスが都市化・工業化に伴う家庭や地域社会の再生に大きく寄与した要因は、次の2点に要約できる。第1点は、女性の「身体的母性」を子どもの本性や願望、必然性への深い洞察を伴った「精神的母性」にまで教育し得る環境を整えたことである。そして第2点は、疎外され居場所をなくしがちな貧民の立場から社会を見、そのニーズを満たす地域の教育・福祉センターを構築したことにある。この2点は家庭や地域の教育力再生を求められる現代の幼稚園においても、重要な観点と考えられる。

注

- 1) 「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について—子どもの最善の利益のために幼児教育を考える—」森上史朗『最新保育資料集』2007年、340頁。
- 2) 「幼児教育振興アクションプログラム」同上書、366頁。
- 3) アメリカにおける1870年代からのフレーベル主義幼稚園の発展については、拙稿「無償幼稚園の発展とセトルメント事業」『日本の教育史学』第38集、306-324を参照。また、ジェーン・アダムズの苦悩と挫折について、入江直子「一女性の自己形成—ジェーン・アダムズの場合—」村田泰彦編著『生活課題と教育』光生館、1984年、261-280頁が参考になる。
- 4) シカゴ博におけるペスタロッチ・フレーベル・ハウスの影響については、拙稿「19世紀末期のシカゴにおける幼稚園改革の系譜—ペスタロッチ・フレーベル・ハウスの影響を中心に—」『鳴門教育大学研究紀要（教育科学編）』第13巻、1998、89-97頁を参照。
- 5) Aldrich, A., "Notes of Visits to kindergartens," *American Journal of Education*, 1880, 30(3), pp.881-888. Lyschinska, M., "A German Kindergaren," *American Journal of Education*, 1880, 30 (3), pp.889-894. リュシンスカは11歳の時、父親と共にヴァッツムを訪れ、ブライマン家との交流も深く、後にシュラーダーの伝記や幼稚園に関する著書を出版し、これがアメリカの幼稚園運動家に影響を及ぼした。
- 6) Peabody, E. P., *Lectures in the Training Schools for Kindergartners*, D.C.Heath & Company, pp.160-161.
- 7) "Madame Henrietta Breymann Schrader: The Principles of Froebel, as Understood and Applied in the Kindergarten at 16 Steinmetz Strasse, Berlin.," in Barnard, H., (ed.), *Papers on Froebel's, with Suggestions on Principles and Methods of Child Culture in Different Countries*, Office of Barnard's *American Journal of Education*, 1881, pp.452-458.
- 8) Hall, J. S., "Some Defects of the Kindergarten in America," *The Forum*, 28, Jan.1900,p.584.
- 9) Allen, A. T., *Feminism and Motherhood in Germany, 1800-1914*, Rutgers University Press,1991, p.111. 姫岡とし子『近代ドイツ母性主義フェミニズム』勁草書房、1993年、50-53頁。
- 10) Allen, A.T. "Spiritual Motherhood: German Feminists and the Kindergarten Movement, 1848-1911," *History of Education Quarterly*, Fall 1982, p.323.
- 11) *ibid.*, p.324.

- 12) 豊田和子「H. シュラーダー・ブライマン (Henriette Schrader-Breymann 1827-1899) の女性観と教育構想」『高田短期大学紀要』第12号, 2004, 112-113頁。岩崎次男『フレーベル教育学の研究』玉川大学出版部, 366-367頁。
- 13) 同上, 113頁。
- 14) Allen, (no.9 above), p.114.
- 15) ウーテ・フレフェルト著, 若尾祐司・原田一美・姫岡とし子・山本秀行・坪郷實訳『ドイツ女性の社会史』晃洋書房, 1990年, 70頁。
- 16) Fröbel, Friedrich Wilhelm August, Entwurf eines Planes zur Begründung und Ausführung eines Kinder-Gartens, einer allgemeinen Anstalt zur Verbreitung allseitiger Beachtung des Lebens der Kinder, besonders durch Pflege ihres Taetigkeitstriebes (1840). In Boldt, S., Knechtel, E., Koenig, H. (Hrsg.), Friedrich Wilhelm August Fröbel "Kommt, lasst uns unsern Kindern Leben", Berlin 1986, Volk und Wissen, S.189.
- 17) Ebd., S.191.
- 18) H. ハイラント著, 小笠原道雄・藤川信夫訳『フレーベル入門』玉川大学出版部, 1991年, 173頁。
- 19) no.7 above, pp.452-453.
- 20) ibid., p.453.
- 21) Voß, J., Geschichte der Berliner Froebelbewegung, Bohlan/Weimar, 1937, S. 130-131.
- 22) no.7 above, p.454.
- 23) 姫岡, 前掲書, 25頁。
- 24) Poesche, H. (ed.), Froebel's Letters on the Kindergarten, 1887, trans. and ed., Michaelis, E. & Moore, H.K., C. W. Bardeen Pub., 1896, pp.42-43.
- 25) ibid., pp.36-37.
- 26) 岩崎次男編『近代幼児教育史』明治図書, 1979年, 39-42頁。
- 27) Lyschinska, M. J., The Kindergarten Principle: Its Educational Value and Chief Applications, Wm. Isbister, 1886, p.9.
- 28) ibid., pp.7-8. Lyschinska, (no.5 above), pp.890-891.
- 29) Froebel, F., The Education of Man, trans., Hailmann, W.N., Augustus M. Kelley Pub., 1974, p.64.
- 30) Froebel, F., Mother-Play and Nursery Song, trans., Dwight, F. E. & Jarvis, J., Lothrop, Lee & Shepard Co., 1878, p.172.
- 31) Lyschinska, (no.27 above), pp.12-13.
- 32) ibid., p.13.
- 33) ibid., pp.14-15.
- 34) ibid., pp.15-16.
- 35) Aldrich, op.cit., p.886.
- 36) "The Exhibits of the Pestalozzi-Froebel Haus of Berlin," Kindergarten Magazine, 6, 1893, p.10.
- 37) no.7 above, p.454.
- 38) Aldrich, op.cit., p.883.
- 39) ibid., p.887.
- 40) Lyschinska, (no.5 above), p.893. Lyschinska, (no.27 above), pp.26-27.
- 41) Aldrich, op.cit., pp.884-885.

Educational Practice and Motherhood of the Pestalozzi–Fröbel Haus

— With a View to the Resuscitation of Educational Powers on the Homes and the Communities —

HASHIKAWA Kimiyo

(Keyword : Pestalozzi–Fröbel–Haus, Motherhood, H. Schrader–Breyman)

The Purpose of this paper is to explore the clue to the resuscitation of educational powers on the homes and the communities by discussing the educational idea and practice, and motherhood of the Pestalozzi–Fröbel Haus.

In 1880, the Pestalozzi–Fröbel Haus of Berlin was introduced by Peabody's effort to the United States. Henriette Schrader–Breyman, also Froebel's grandniece, who established this association, had attempted a living embodiment of the spirit of Pestalozzi and Froebel in house and school. She was steadfastly opposed to that conception of the kindergarten which insisted upon only the system of gift and occupation, the early training of the intellect, and the stern discipline of the schoolroom. The plan of her kindergarten, therefore, derived its basis, not from the school, but from the healthy moral–religious life of the family; and the guidance given to the little ones was less that of a school teacher than that of a true mother.

By the 1890s, the American orthodoxy had warned against the Pestalozzi–Fröbel–Haus going because the name of Pestalozzi had added to that of Fröbel; the gifts and occupations had been reduced to a minimum, and gradually being exchanged for appropriate things.

In 1893, the work of the Pestalozzi–Fröbel–Haus was exhibited at the Columbus Exhibit in Chicago. The entire exhibit was under the direction of Annette Hammink–Schepel, who, together with Schrader, of Berlin, had been the presiding genius of the Pestalozzi–Fröbel–Haus for seventeen years. Through the favor of Schepel, the American free kindergartners understood Schrader's thought that the activities arising from home relationships, put to the service of education, would reach far down into all social conditions.

Schrader played the important role in carving out for women a new field of activity in urban reform. Her work began in the Froebelian kindergarten tradition, but the massive acceleration of urban growth after 1870 provided a broader sphere of activity than existed earlier. Under these conditions, Schrader and her coworkers, while preserving the central ideas of spiritual motherhood, developed new concepts of female professionalism.

The objective of the Pestalozzi–Fröbel–Haus was to elevate the people by right education. The means to this end was emphatically to develop the individual through doing. By 'doing' was always implied the satisfying of a need. Schrader and coworkers did not consider that doing which was merely play in imitation of what was seen done by others. Every deed must have a real motive and purpose. Therefore Schrader and coworkers provided the full home environment, and create the family of many members, each with his duty and his obligation, as well as his blessed opportunity to develop by real doing. The family was the highest sphere for activity. Activity was educational only when placed in relationship to real life.

By discussing the educational idea and practice, and motherhood of the Pestalozzi–Fröbel Haus, we would have been convinced that without the only true corollary of the home and family atmosphere, we hardly possible to resuscitate the educational powers on the homes and the communities, cultivating humanity in the broader sense.